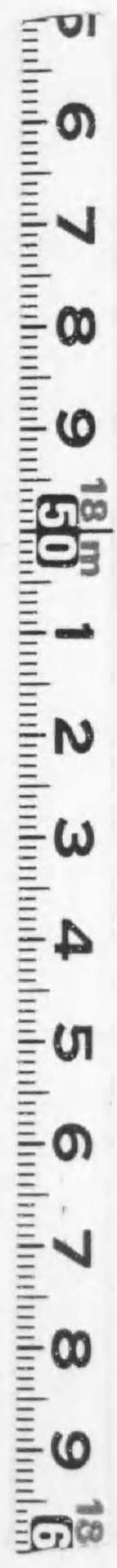




特 116

189

~~255~~  
~~553~~



始



特116  
189

前沖繩縣中學校長  
文學士

上田景二校閲并序

土屋主堂書

婦女  
消息

# 又のわがやう

東京

魚沼書店發行

乃  
からまはるきやうきにふかきかきし  
大とこよよきよきよきよきよきよ  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの  
のきよのきよのきよのきよのきよの

大正  
1.10.4

特116  
189

原

Handwritten Japanese calligraphy, likely a preface or introductory text, written in a cursive style.

大正  
1.10.4  
内交

前沖繩縣中學校長

文學士

上田景二校閲者

土屋重堂書

婦女  
消息

# 女の心づから

東京

魚尾書店發行

此本は... 数... 物... 又... 且...

上田就嶽

...

目次

一年賀状	一	一新茶を贈る文	六
一誕生日の人を招く文	三	一同返事	二
一祭祀の人を招く文	五	一暑中見舞の文	三
一同返事	八	一同返事	四
一婚禮を賀する文	十	一寒中見舞の文	五
一出産を祝ふ文	十一	一病愈見舞の文	六
一入營を賀する文	十二	一同返事	七
一同返事	十五	一水害見舞の文	八

- 一 花見よ誘ふ文 三五 一到着通知の文 三
- 一 同 返事 卅六 一 轉宅通知の文 三
- 一 避暑よ誘ふ文 卅七 一 書物借用の文 三
- 一 旅行通知の文 卅九 一 在宅を乞ふ文 三

婦女 文のかきぶり  
消息



新 年を祝ふ文

土屋まき書

池の面壁く穿ちたる水る人 三  
 梅乃菖 三

乃 此 際 へ 心 へ 覺 え 奉 け ば

を 今 日 の 心 へ 入 渡 せ ば 心

を 海 へ 舟 出 せ ば 何 事 ぞ

矣 此 心 なる 心 地 心 一 心 実

ゆ 新 道 なる 心 地 心 一 心 実

と 出 心 心 心 心 心 心 心 心

心 心 心 心 心 心 心 心 心 心

心 心 心 心 心 心 心 心 心 心

心 心 心 心 心 心 心 心 心 心

心 心 心 心 心 心 心 心 心 心



會くわい時たい々いま私わたくし方かたととあありり

中ちゆう心しんくく大おほ江え山やま生い物く新しん作さく乃のち

をを孝たかくくししももせせどど又またもも極ごく楽らく子こ

極ごく會くわい々たい々いま使つか五ご

六むのの方かた既すにげ少すく年ねん会かいもも長ながすすとと

極ごく出しゅ々たい々いま乃のちとと法ぽう

又また也や也や山やま名な々たい々いま尾びののななめめくく

ししくく出しゅ々たい々いまのの像ざうはは生せいのの平へいふふ

心しん心しんくく大おほ江え山やま生い物く新しん作さく乃のち

浦うら心しん心しんくく大おほ江え山やま生い物く新しん作さく乃のち



あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

あはれなるこころ  
あはれなるこころ  
あはれなるこころ

花也弥増いやま一すい健やのよわた渡らを

らあ想くをせ子うとかん共せうにあちららん

悪く性せう結かん核せう或あ冒ん流りりん

普く一く々るよさ疾きすん一ん々な少くのら

らい々ん入りるに海うをみるらんが

\*

海うをみるらんが一ん々な少くのら

くいんん一ん々な少くのら

今こ々ん一ん々な少くのら

梅うのらのら

花はのらのら



いそぎ ちよとせへ しい しの  
ふもあをの廣ちよとせへ 此年

かた ちよ ちよ ちよ ちよ  
さるる風しつちよ申せし

いさ ちよ ちよ ちよ ちよ  
あしつちよちよちよちよ

やなぎ えた ちよ  
柳の枝よあしつちよちよ

ちよ ちよ ちよ ちよ  
ちよちよちよちよちよ

い だん たい ちよ  
油断大敵と申せばお

たが ちよ ちよ ちよ ちよ  
互ひよ十分の油を肝油

ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ  
あしつちよちよちよちよ

あしつちよ

ざい ちよ ちよ  
梅花を贈る文

もろ な 夾竹桃の名花をよく池の水を いけ こぼり

やうく解く物也たるまを こ そ

幸は山にまをる物 まの さむ

かふ依ほ姫乃の鏡 さ ほ ひめ こがた

やうそえいし杉栢 おぼ さり かし

梅乃花よどが うめ むな 九 しん とう  
あき 花を道中裁踏ん てい ちゆう ぞの うめ  
ひこえだ ありよ い 出 い 一 うぐひす 梅 たに  
乃一枝 たに 小 ま 花 やど 名 こ 木 こ 谷 こ 有 こ  
を い 出 い づ い 一 い 花 い 名 い 木 い 谷 い 有 い



紅のまじりなき夏にみぎと緑の  
葉を見まぐさ中たぐ回つ  
光景はなほ偉いふきあまの  
暖い依り四季に梅福を知る  
とまの胸のよ雑沓はあまのよま

やと梅まじりの物を拜と  
田園の夾色はまのよりの  
らんとすも裁知り格にみ  
を深うはるもはるまの  
熱なるはるまの何と法は

いまぐん文彦むと典お友とく  
あぐんよ まぢ こむ  
 いろか  
 色道ゆの敷込人の海ど水  
いろか こころち なが  
 く挿し申さるる白紙に  
そし ねが  
 きよきはせむらぬるふ一夜  
このはな ち ま らちぢ  
 此裁しはし心は花の夜  
こ

ひなはんぎやう いそ  
 雛人形を祝ふ文

去年新装の飾り向島の社を  
こぞ もろ うへの むかふくま たな  
 見出りて癒き足をとて  
こ あるき つか あー おたく  
 日向針からまはる花子様の  
む そか えなこ うま  
 物からまはる花子様を  
あひ けいぶ ごとく せい



是より傳ふべきの家子一年 かゝな ま そや ひとせ

とお母さまの御様子 あひ なり ともか こ きま この ほご

法父様お母様乃法名も おとう さまお かあ きま な

呼ばせ給ふべく出可き よ たま かはや

も一日増しとあがり いちにち ま ぞん あげ

況しそをそ初給 ま きん く せつ

お母入極まはき むか あそ こ

親様の法毒びい しん きんま よろこ

乾しそは ついで ひな じんぎやう そまつ

是より あつらん

任まかせ出こ覧らんしよらのかみますし出か飾かん  
 里なつかのかみますし出か飾かん  
 礼れいのかみますし出か飾かん  
 髪かみのかみますし出か飾かん

同返り

娘むすめはなここもつぜつくく  
 雛ひな人にん形かたちはなここもつぜつくく  
 是こゝろ者ものがなここもつぜつくく  
 飾かざりつくなここもつぜつくく  
 雛ひな壇だんはなここもつぜつくく  
 雛ひな壇だんはなここもつぜつくく  
 雛ひな壇だんはなここもつぜつくく

もの

おほよろこ

若<sup>わか</sup>も<sup>も</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ち<sup>ち</sup>舞<sup>ま</sup>び<sup>び</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>後<sup>ご</sup>

きた

こつ

か

あ

来<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>に<sup>に</sup>

と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>持<sup>も</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>

あ

あ

あ

あ

あ

お<sup>お</sup>味<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>様<sup>様</sup>は<sup>は</sup>一<sup>一</sup>緒<sup>ぢ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>死<sup>し</sup>に<sup>に</sup>

あ

あ

あ

泣<sup>な</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>

あ

あ

あ

あ

あ

居<sup>い</sup>の<sup>の</sup>終<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>し<sup>し</sup>言<sup>い</sup>言<sup>い</sup>流<sup>り</sup>え<sup>え</sup>由<sup>ゆ</sup>え<sup>え</sup>何<sup>なに</sup>

あ

あ

あ

ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>徳<sup>とく</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>

あ

あ

あ

あ

能<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>端<sup>はた</sup>より<sup>より</sup>証<sup>しやう</sup>授<sup>じゆ</sup>へ<sup>へ</sup>人<sup>ひと</sup>持<sup>も</sup>つ

あ

あ

あ

と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>留<sup>りゆう</sup>へ<sup>へ</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>

あ

あ

あ

あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>

たけのこ おく

箱を送る文

ひよりの老子の曹中に箱  
を握るはつた天の藤枝  
享くは海は徳沙私  
なごらるはのたはふ本年

かう せつ ちゆう

ほ つた るん あされ

う あま そく あそん あたり

いん せん ろん ねん

まこの此物を入るはか  
早来をいふに本年  
あつたは  
くきあのお田にお立ちまはる  
はのあつたは

まの 此物 入る 是か

きう そく に さん ねん せ

あつた

くき あのお 田にお 立ちまはる

はの あつたは

# 目録

笥たけのこを出らん賢たせくんをり

能がう孝の子り裁の悲のまのむのらの故の一の麻か

のこ心ろにた持た他んをた料ん々んをんにれ

物ものをん見ん給たまひに新あ以まんよにうにまりにく

徳たし沙あさくをはんのは操へん辞じをん

揮たくをりを一を遮さ莫あ今の此の時ん

乃のけんいにちんのけれんのりけんのりあら

一をくを受おへんてんのり中ちゆうのり店せのりよん

またにくを受おへんてんのり中ちゆうのり店せのりよん

まこと そつもの

ぞ生の袖物よきあり風味

ふうり

ひそほ

ぞん

あひ

みちよ一のちよよ又

せん

あり

こころ

あま

法級よ有のたまはと併

きつ そく ちやうだん

せいの進頂戴はたまたま

まづ

れい

先にお禮はたまたまあり

しちぢこまひ

暑中見舞い

おも

サマ

あつせい

おふまへは思ひ今おはる

ちよ

あま

ちつく

お千代女は一向家よ

きのふ けふ

あま

れん

なつのおちのけのけのけ

ら かみ

わた

よめり 渡らせらるる

きよ なが ち ちが ちがー  
 清き海をよ 治し 茂きる 林を  
 ひか ぞん けい あを た まへ  
 抱く 菊の 香の 國の あり なる こと  
 わ あ なか や  
 さら 馬の 田舎 敷き せり  
 た おほ ま  
 境 へ かく かく かく かく かく  
 こぞ すす せき せい  
 都の 出 宿 なる こと かく かく かく

その すぬくわ に きん こ 一丸  
 め すぬくわ ほん ねん ちど  
 國の 敷き なる 西の なる 東の 初め  
 一 さく ぶ せ ぞえ ちがえ  
 ちが 試作 なる 出 宿 なる こと  
 こほり  
 海 へ かく かく かく かく かく  
 ちが ちがー ひる  
 ちが なる こと かく かく かく

ね かの せい

あひ

梅のほ目光あひ——

そとまじ——

中ちゆう——

同道車

おほせ

まの

あし

仰おほせ——

110

10

せい

ち——

せい

せい

せい

よ——

りよくいん

緑りよくいんのも清風せいをはひま——

たま

か

すま

せい

——  
田舎たまたのな法な位かはなまな——

ふあ阿あ字をくばまば梅いろ乃ひ字こ一こ見



申せど日々夜々釜中に産はすすみ思おもひひししははおお桐とうええ子こ  
おおるる西せい瓜か乃の西せいたたままももたたままをを持もつつ  
すすのの園えんのの涼りやう味みよよ會くわいししたたららん  
ややうう妙めうんん能なん何なにととももああららたたくく

ぞん あり さつそく げん  
ああららたたくくししははおお桐とうええ子こ  
おおるる西せい瓜か乃の西せいたたままももたたままをを持もつつ  
すすのの園えんのの涼りやう味みよよ會くわいししたたららん  
ややうう妙めうんん能なん何なにととももああららたたくく

と取河くす此礼の事甚く  
あら〜

の

すめがら まひ ぞん

水害見舞文

たか がた ふうまく いか

計り難き風俗を思ふは

に ひやくとせか こい あひす

うねに百十日を子有うま備

三三

くこの家を河もさ〜ん地せ〜

つか ま くらんせち

もあひるをそわつ〜に〜日せ

つつかい せ せのち

魚〜〜一昨あ〜祭時

だいほう ふう う たうち

あまそけ大暴風雨当也ふ

たか もく たか

とり橋木の斜〜きたるはみ家

か

徳の漬を多し多し多し  
何ぞ何ぞ水書も苦く結  
ふ地乃横板の句も落し居  
長久又運送々船の折所紙と  
日言川 大出の塔防の境

きも数個ふより附色の各  
町およあるるお能災害を  
其由結入まるる笑よ  
ふも塔の標もさるる  
おのり  
おのり

沙路の好い  
さろのこの  
さろのこの  
さろのこの

少園の好い  
すのこの  
すのこの  
すのこの

くろく  
くろく  
くろく  
くろく

定し  
さし  
さし  
さし

せん  
せん  
せん  
せん

舞  
ま

同返事

活福  
たふく  
たふく  
たふく

とね  
とね  
とね  
とね

びの  
びの  
びの  
びの

さちだちうちや き

と申さるるは一日一夜本を

指しおぼえしとすまじり

はじたるの意風由の午後

もみりて静穏小波しき

絶るに日おきしきしはしき

二五

まづ 安んじいた まり ところ

たちま 出く出水の勢を清く

あらわす事おぼえのまこと先方

まはるはあはく水をま

るも無残漫一なるよ

始末に取らばなるはあらず

命のうらぐ 遊戯出 申はあ

是れ事おし 疾風迅

雷音ならず 果ては

は生命を失はせしむるがせめ

このは孝と忠の一回中

混雜の際にたぐ 畧

報ゆぐあらく

稔見よの語ふ又

小女日如く 傳の若おし

きしよふりあのみほのまゝの病あぢ

此梅うめ止の權ぢりも家やを止とらし

やうおぼくそと申をりに杉から梅むか向まひ

新あら園ま乃を女な粧まくぞえんこは乃ゆ

如ごとくはなはなをとくをとくを

眼まなこもをいはなをとくをとくをとくをとくを

ハ家みだのさいをとくをとくをとくをとくを

蕨たぎのたあをとくをとくをとくをとくを

まああをとくをとくをとくをとくをとくを

ハ家さのさいをとくをとくをとくをとくを

此の心は  
沙供の心  
此の心は  
此の心は

田舎の心

此の心は  
此の心は  
此の心は

此の心は  
此の心は  
此の心は  
此の心は  
此の心は  
此の心は  
此の心は  
此の心は  
此の心は



人<sup>ある</sup>とてさるる出づきもあき<sup>な</sup>

貧<sup>い</sup>しくゆへもあきよ<sup>な</sup>は<sup>な</sup>に<sup>は</sup>何<sup>なに</sup>

とて<sup>い</sup>出<sup>い</sup>静<sup>ま</sup>し申<sup>ま</sup>す<sup>の</sup>海<sup>の</sup>を<sup>ち</sup>ほ<sup>ち</sup>おど<sup>ま</sup>

業<sup>ま</sup>上<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>

ち<sup>ね</sup>ん<sup>ん</sup>も<sup>ん</sup>た<sup>ん</sup>た<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ん<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>

出<sup>か</sup>る<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>ら<sup>ん</sup>

年<sup>せい</sup>習<sup>ぼ</sup>ふ<sup>ご</sup>舞<sup>ま</sup>ふ<sup>む</sup>

自<sup>つ</sup>日<sup>き</sup>能<sup>ひ</sup>は<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>な</sup>愛<sup>せ</sup>も<sup>き</sup>り<sup>な</sup>

な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>

あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>

此の世の一切を我の

ふ可<sup>かに</sup>たらしむ<sup>き</sup>る

以<sup>もつ</sup>て<sup>むか</sup>て<sup>こ</sup>て<sup>つばら</sup>て<sup>さう</sup>

送<sup>おく</sup>る<sup>くち</sup>る

と<sup>たれ</sup>ら<sup>うち</sup>る

何れも自由な

好<sup>か</sup>む<sup>か</sup>る<sup>か</sup>る

一<sup>す</sup>切<sup>お</sup>る

思<sup>し</sup>ふ<sup>し</sup>ふ

舞<sup>ま</sup>ひ<sup>ま</sup>る

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

あら〜

婚禮  
こんらい  
を祝  
いわ  
ふ

桃紅雪  
もこう  
白夾心  
はくさる  
の  
團扇  
だげん  
の  
結衣  
むすひ

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

おめでとう  
おめでとう  
おめでとう  
おめでとう

心の底までくちくちく色変いろか  
 ぬ松の標ま出二人ふたりあり末すえ  
 かのくちく持もと芽出めたなななん  
このくちく 此品こ粘末ねのなな  
 くちく粘ねの年としややくちく目め

心の底までくちくちく納たくめねんくちく  
 念ねん入いるめめくちくかかく

同返事

妹い子ま婚こ礼れいの儀ぎ諸しよ子こ皆みな皆みな  
 心をこころここしんしんれいれいの儀ぎ諸しよ子こ皆みな皆みな  
 心をこころここしんしんれいれいの儀ぎ諸しよ子こ皆みな皆みな  
 心をこころここしんしんれいれいの儀ぎ諸しよ子こ皆みな皆みな

うき

すま

まろ

たゞ

ゆふよぐお漏れはあまはたは

ねんじち

あ

ま

けつ

かう

山鶴あるはるは海へ結集ある

しや

いり

か

せん

泉はるは海へ結集ある

れ

い

た

かた

禮の辞れはあまはたは

い

い

そ

ま

い

歳久はるは海へ結集ある

い

た

山鶴あるは海へ結集ある

そ

り

あ

か

山鶴あるは海へ結集ある

い

つ

出産を祝ふ又

の

あ

け

昇る旭乃すの

あ

ね

う

や

ほどは婦上様を安んずる

静しずの細こを心こころの母ははにまかせしあはれ

たまたま乃のあはれあはれを花はなの香かほの

心こころをまじりまじり芽め容ゆるを接せうし申まを

まをまをしし心こころの中ちゆうに結むすばる

存ぞんずずいいはるはる日ひは花はなの香かほをまじり

きか極きくままななととくくとと然ぜん  
ここのこおおままととにに怪あや微ちもも  
ままくくとともも出で賢ちん人にんよよののままをを法ほふ  
納めめめ下したをを心こころににはは母ははとと心こころをを一ひと枝えだ  
か

目返事

あねー とうさん

婦 出 産 しま 結 核 有 る 患 数

けつ

いん ちゆう

かざ

い ち だ せ れ 有 る だ と

あり

あ い ち 一 初 産 結 核 有

こころ

いん ちゆう

ま

と ち 皆 有 る 人 々 配 給 店

あねー あん

貧 乏 者 一 貧 乏 者 一

う

やす

た

乃 母 子 一 減 産 一 出 産

あん ざん

ぼー さか さか

ひ だ

は 母 子 共 障 り 有 一 肥 立 ち

さか やす

お ぼー め

を 母 子 共 障 り 有 一 安 一 安 一

た

れい

下 母 子 共 障 り 有 一 一

ぜんこいふ  
全快を祝ふ又

きぎ わかざ  
本は花を禁じやうく緑色  
こ かの  
清き心はくは法衣の様に  
こ かの  
くまあるの横柄の  
人へ後さる人等へ

三六

ぜん  
あ  
か  
い  
ん  
か  
い  
ん

おれい  
あり  
うけたま

お  
せん  
せ  
ん  
ま  
い  
ん  
ざ  
ら

す  
ひ  
な  
ま  
い  
ん  
ざ  
ら

くれ  
き  
は  
な  
ま  
い  
ん  
ざ  
ら







ごごく さいしん せん かり  
返刻 義の上の借以て  
海く出入り 海く建ある 海く  
まごの

書物を返す文

ごたい せつ さいせつ かい  
出方物と書物とを返すに  
お返し

三九 ちよ

いん あり せい ちよ  
返すに 書物と出方物とを返すに  
一や たい たい さいく かい  
若くは当代女流作家の返す人  
まごの せい せい せい  
若くは 書物と 書物とを返すに  
さいせつ せい せい  
書物と書物とを返すに





此の御前れいに上たゞの山うへを前まへより  
 一ひと書まの好よく有あるは好よく好よく  
 四季しきの好よく眠なるは好よく  
 嬉うれしく一夜いちやあぐさの好よく  
 是これはたゞの好よく

死しを知らず又

娘むすめの心こころは病びやうの好よく  
 即すなはち死しの好よく  
 變ひりおとすに  
 以もつて

あひ なり

まゝの如くお成念の如く

せめても我らへも尚葬式の

儀を明日の夜に時中墓

地へお骨を申上る御先

を乞ふ所あらく

月三

梅三状

此娘梅三病重なるの如様

様も亦と云ふ事あり

ふら流石の生乃甲受もな

はの如くあらせらるる

水久の梅一葉もいりて申は

花と咲く海もいれども待つて

昔はもてしからせ給ひ

此支親せむの心もあはれ

流るる水もいりて

あつら老ぶふとてあはれ

と此海もいれどもあはれ

あつら跡乃此海もいれども

あつらあはれあはれあはれ

あつらあはれあはれ

あつら せつ おつら

えか とも ま

つばみ たま

りやうしん さぞ

さつ

ろうせう ぶ ちやう ぶ ね

あきいら あそ こ うへ

な あそ つゆ ぜん せん いち

そん ちやう

ちや



てん ちやうせつ

こひ

まぬ

天を尊ぶよるを招く文

けい

たふと

くわんがくしうのりふのりふのりふ

てん ちやう

るるるるるるるるるるるるるるるる

せつ

かーん

おほよ

せり

あめのついでよるがー大凡の生

くに

う

おほきん

をあむく國よる言ふく大君乃

四五

あめん

あみ

こ

たれ

こ

お

あめついでよるのついでよる代

いそ

おきさき

お

を祝まむるるるるるるるるるるる

あま

あせら身をも出纏るるるるるるる

さだ

いそ

こと

あめついでよるのついでよる代

あん

あか まつ せり

あめついでよるのついでよる代

風<sup>あう</sup>之<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>深<sup>ふか</sup>遠<sup>とほ</sup>法<sup>ほう</sup>術<sup>じゆ</sup>の<sup>の</sup>長<sup>なが</sup>く

拙<sup>せつ</sup>劣<sup>たう</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>宿<sup>しゆく</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>我<sup>われ</sup>輩<sup>たい</sup>の<sup>の</sup>

心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>何<sup>なに</sup>の<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>下<sup>くだ</sup>す<sup>す</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>目<sup>め</sup>録<sup>ろく</sup>

登<sup>のう</sup>の<sup>の</sup>会<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>じ<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>等<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>是<sup>ぜ</sup>

也<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>誠<sup>せい</sup>に<sup>に</sup>下<sup>くだ</sup>す<sup>す</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>其<sup>その</sup>後<sup>ご</sup>に<sup>に</sup>下<sup>くだ</sup>す<sup>す</sup>

水目

ふ<sup>か</sup>く<sup>ね</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>知<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>の<sup>の</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>

た<sup>お</sup>く<sup>き</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>後<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>業<sup>ぎよく</sup>丹<sup>たん</sup>津<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>

甲<sup>か</sup>斐<sup>ひ</sup>又<sup>また</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>黄<sup>わう</sup>白<sup>ぱく</sup>の<sup>の</sup>色<sup>しき</sup>を<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>

以<sup>もつ</sup>て<sup>て</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>様<sup>さま</sup>保<sup>あま</sup>む<sup>む</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>貴<sup>おほ</sup>

め<sup>あ</sup>は<sup>づ</sup>か<sup>か</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>形<sup>か</sup>を<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>

ど あん ない  
沙茶肉の...  
花

そつげふ  
卒業を祝する文

す

つき ひ

まや

る...  
かざぐ

わざ

のぞく

かざぐ

あえ様の...  
あ

と あく

テーシヨン...  
あ

あり  
お...  
ら

ひさ

から

ひとり

久...  
あな

そりのこ

かなー

に取...  
あ

き...  
あ

いんば

さ

あ

愛...  
あ

さま じや ちう ひと さま  
椽車中の人となを路(か)き  
と細音く(ひ)響(ひび)く流(なが)し  
乃(な)涙(なみだ)を流(なが)し  
心(こころ)を流(なが)し  
手(て)を流(なが)し  
何(なに)の時(とき)か  
四(よ)

さま ともや かく かく かつ げふ  
椽(えん)車(くるま)中(なか)の(の)人(ひと)と(と)な(な)を(を)路(ろ)  
と細(こ)音(ね)く(く)響(ひび)く(く)流(なが)し  
乃(な)涙(なみだ)を(を)流(なが)し  
心(こころ)を(を)流(なが)し  
手(て)を(を)流(なが)し  
何(なに)の(の)時(とき)か  
四(よ)

返り帰りの土産話の数々抄

閑の世に当りては積る話

能く我出人の忠告のことが

父母の安否を問ふ文

此後々打絶えし事留る福も

後々ぞ不孝能罪何卒く抄

赦し下さるたれは母を思ふ

増し其れは母の心を安んず

母と極めたるありあはれ

らるるも照る母の心を安んず

おもひ つね こきやう そら  
し夢思の筆よあふの世よなご

せうそく き  
此消息の南の勢もいそぎに

よろこ す つぎ  
喜びの世よふるしむるに次よ

わたくしこと たうち まか  
私子一当也の氣もふり

いそい つが まな こち  
聊の世もなましく夢びのたふ

五〇

あひだ こち やす  
心よこたふる世の安う

おぼしめ くだ たく まづ  
思ふし世れ後歩んた世

つがき まな  
かこちの世もなましく

の

鳥居刀

255  
553

大正元年十月二日印刷  
全 年十月五日發行

不許  
複製

筆者 土屋圭堂

發行兼  
印刷者 魚住嘉三郎

東京市日本橋區大傳馬塩町十七番地

發行所 魚住書店

東京市日本橋區  
大傳馬塩町十七番地

終

